

〈研究論文〉

## 縄文時代集落考 (VII)

後藤和民

### VII 共同体と集落(承前)

以上のとく、集落の概念のなかには、すでに「ある結合紐帶によって集合した人間の単位集団」の存在が前提となっている。おそらく、私の提起した集落概念が従来のものと本質的に違っているとすれば、それは、人間集団の存在を強調した点にあるだろう。しかし、遺物や遺構などの皮相的現象のみを中心とする事実中心主義の考古学から脱皮するためには、これは強調してもしすぎることはない。そもそも人間集団の存在しない集落などありえないし、人間集団を捉えられない集落研究など、歴史科学として何らの意味もないからである。

もともと、現象によって本質を捉えなければならないのが、考古学の宿命ではあるが、だからこそ、その現象を現象として認め、捉えるための基本的な観点や問題意識の如何が問題となる。集落の存在には、それを構成した人間集団の存在が前提となっていることは当然であるが、それをただ「縄文人」とか、「人間集団」という抽象的な観念だけで捉えただけでは、その実体はない。しかも、集落の住居址群の分布形態とか、家屋の構造、規模・形態などという皮相的な現象のみを捉えてみても、その背後にある人間集団の実体はどこにも浮かびあがってはこない(註1)。

そこで、かつてそれらの現象の型式分類などによって、人間集団の類型を捉えようとする試みがあった。従来の考古学的観点や方法として、当時それ以外には考えられなかったので、たまたま、そんな試行錯誤も行ってきただけあって、それが妥当な観点や有効な方法であるという保障はどこにもない。有名な先学が試行しているから、一見正しいようにみえるが、実は大変な誤ちを冒していたのである。例えば、土器型式の細分をもって、それをいきなり人間集団と解釈した杉原在介の『原史学序論』(註2)などはその典型であるが、集落研究においても、同じ誤ちを繰返している。しかも、そこには、人間集団を実在した人間集団として捉える明確な観点がないことが如実に墨露されているのである(註3)。

考古学が歴史学であることを、雄々しくも声高らかに主張したのが杉原在介の『原史学序論』(註2)であった。それは学史上銘記すべきであるが、それから40数年を経た今日でさえ、まだ認識していない者が多い。そこで筆者が考古学の目的は歴史叙述にあることを、再三にわたくち主張してきたが(註4)、それさえいまだに理解できない向きが

ある。集落研究の目的が、この歴史の主人公たる人間集団の実体を捉えることにある以上、歴史叙述のためには、この集落の構成者たる共同体との関係を明確にしておかねばならない。

### 1. 「共同体」の概念

集落の概念と同じく、人間集団の実在を前提として、とくにその人間集団の「社会組織」を中心として、その性格を捉えようとするものに、「共同体」という概念があることは、すでに前章でも述べたとおりである。また、その共同体の概念についても、前節で多少触れてきたところであるが、ここに集落との関連において、改めてごく簡単にまとめておかなければならない。

ところで、この「共同体」なる概念も、考古学界においてのみならず、実はその基礎となっている民俗学、社会学、経済史学においてさえ、その捉え方はまちまちで、定説らしいものはどこにも見出されない。たとえば、戦後、『共同体の基礎理論』(註5)をテキストに、いわゆる「大塚史学」なるものが流行し、共同体の研究が盛んになり、考古学においても、その影響は少なくなかった(註6)。そこで、この『共同体の基礎理論』と、考古学における「共同体」の捉え方として角田文衛の把握(註7)とを対比させてみることにした。

#### (1) 大塚久雄の『共同体の基礎理論』

大塚久雄のこのテキストは、あくまでも、「すでに過ぎ去った悠久な世界史の流れのうちには、アジア的、古典古代的、封建的、資本主義的及び社会主義的とよばれる生産様式の継起的な諸段階が存在した」ことを前提としている。そして、資本主義的生産様式の発生を境にして、それ以前にあった生産様式の共同体的構成が崩壊することに着目し、その共同体一般に関しての本質について、従来の諸学説を整理したものだという。

しかし、大塚久雄が基礎としているマルクスの遺稿『資本主義的生産に先行する諸形態』(註8)、『経済学批判』(註9)、『資本論』(註10)そして『ヴュラ・ザスリッヒへの手紙』(註11)においてさえ、「共同体」自体の概念はどこにも明確には規定されていない。したがって、それに基づく『共同体の基礎理論』においても、共同体そのものの基礎理論を提示したものではなく、むしろ単に、マルクスの『資本主義生産に先行する諸形態』の各段階における共同体の様態を整理したに止まっている。

とくに、マルクスの『資本論』や『資本主義生産に先行する諸形態』は、おもに農業生産の段階以降の「農業共同体」を中心として論ぜられており、それ以前の「原始共同体」については、「原型からもちこされた諸特徴」(註8)とのみ規定されて、それが随所に散見するに止まり、むしろ考察の対象外にあったとみるべきであろう。だからこそ、この農業生産以前の段階については、マルクスもエンゲルスも、ともにモルガンの『古代社会』

(註12)における段階説に依存せざるをえなかったのであろう(註13)。

それでも大塚久雄は、「共同体」という用語について、次のように解説している。すなわち、「共同体」(Gemeinde)にも、「広狭やや異なった用語法」がある。一つは、「共同体」という語を、とくに無階級の原始共同組織という意味での「原始共産態」(Urkommunismus)とほぼ同義に考える用語法である。いま一つは、かなり広い用語法で、そうした「原始共同態」(Ursprüngliche Gemeinschaft)の歴史的連関をも含め、その後封建社会の終末にいたるまで次々と継ぐ生産様式の土台や骨組を形成した「共同組織」(Gemeinwesen)全般を問題とするものだ、という。そして、このテキストでは、後者の広い意味における「共同体」の概念を用いている。

## (2) 「共同体」と「共同態」

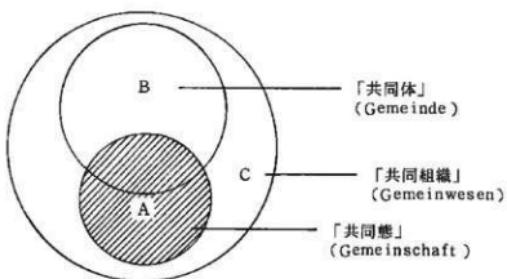
ところがこのテキストにおいては、「共同体」は Gemeinde の訳語であるとし、これに対して Gemeinschaft には「共同態」、Gemeinwesen には「共同組織」という訳語をあてている。それは、マルクスにおいてもウェーバーにおいても、「原始共産態」を指すのには、「共同体」(Gemeinde)ではなく、「共同態」(Gemeinschaft)の語を用いているように思われるからだという。しかも、「と云っても、『共同体』Gemeindeが『共同態』Gemeinschaftと全く別物であると考えられているわけではない。少なくとも、後者は前者の本質的な一面としてつねに何らかの程度においてそのうちに含まれているとされているのである。いま一つの『共同組織』Gemeinwesen という語はそれすべてにひとしく使用されているといってよからう」というのである。すなわち、概念の包摂関係を図に示すと、第1図のようになる。

以上のように、「共同体」と「共同態」のそれぞれの概念規定も不明確であり、両者の区別も判然とはしない。しかも、さらに先に進んでみると、次のような記述がある。

まず、「共同体」の成立において、「労働の客観的諸条件が多かれ少なかれ『自然』たる性質をおび、『大地』Erdeのうちに包括されて立ち現われる」。「これと全く同じように、それに対応する労働の主観的条件、すなわち労働者主体 (=社会をなして生産する諸個人)もまたこの生産力段階においては当然多かれ少なかれ『自然』たる性質をおびる『自然的諸個人』natürliche Individuenとして立ち現われるはかはない」という。

そこで、「『共同体』は何よりもまず、このような生産する自然的諸個人が『自然』状態から『歴史』のうちへ直接にもちこんだ原生的集団性ないし血族組織——そこにはいわゆる原始的「群団」Horde, Herdenwesenからはじまって或る程度複雑な内部構成をもつ『種族共同態』Stammgemeinschaftにいたるまでの一連の発展がある——こうした『原始共同態』Ursprüngliche Gemeinschaft, communauté primitiveと何らかの形で根底において関連をもちづけているような社会関係だということができよう。すなわち、そのよう

な『原始共同態』は、それを構成する諸個人が『大地』の諸断片を占取しつつ生産活動の中心をしだいに農耕にうつすにつれて、單なる『原始共同態』からしだいに『農業共同体』Kommune agricole, Agrargemeindeへの移行をなしとげるに至るのである。」



第1図 共同体の概念、模式図

そのさい、「歴史的所産たる種々な人工的受容 Modifikation をうけつつも、その根底にお長きにわたって「原始共同態」Urgemeinschaft という『原型からもちこされた諸特徴』les caractères empruntés à son prototype、すなわち『共同組織』Gemeinwesen を何らかの形で残すことになるのであって、この『共同組織』を根底にもつ社会関係こそが『共同体』Gemeindeなのであり、またそうした云ば原始的事態を残している限りにおいて『共同体』は『共同体』たりうるのである」というのである。

したがって、この説明を読むかぎりにおいては、「大地」という生産手段を中心に、より自然的条件に支配されている採集・狩猟の生産段階にある「原始的」な人間集團に対して「共同態」と呼び、ひき続き自然的条件に左右されつつも、農耕というより人工的生産段階に達した人間集團に対して「共同体」と呼んでいる。すなわち、「共同態」と「共同体」の概念とは、その背景もしくは基盤となるべき生産形態の変容によって区別されており、あくまでもそこにはモルガンなどの文化進化論的発展段階説がベースとなっている。

## 2. 繩文時代の「共同体」

### (1) 堀越正行の「共同組織」(註14)

前章でも述べたとおり、そもそも縄文時代の文化を、モルガンやマルクス＝エンゲルスやG・チャイルドなどの生産形態による発展段階説によって捉えることができるであろうか。たとえば、縄文時代には明確な農業生産はなかったとしても、その生産形態の全容が、

はたして農業生産より低次元な段階にあったという実証がどこにあるのであろうか。また逆に、藤森栄一の主張するように、縄文時代にはすでに「原始農耕」があったとすると、その社会組織は、にわかに「原始共同態」から「農耕共同体」に組みかえられるのであろうか。所詮、こうした概念の設定は、歴史現象の実態から帰納されたものといいながら、ヨーロッパ、アメリカを中心とする欧米人の机上の空論にすぎないのである。

したがって、前述の堀越正行が、縄文時代は「まだ採集経済であるが故に、村落は存在しないし共同体は形成しないのであり、単位集団（=共同態・ゲマインシャフト）が営む集落と原始共同体という社会関係があるにすぎない」（註14）と規定したことは、以上のマルクス＝エンゲルスや大原久雄などの論拠に立たないかぎり、何らの根拠もなくなるのである。第一、縄文時代の生産形態が、はたしてただ単に、從来把握されてきた「採集経済」という概念だけを包括しうるほど単純なものだったか。堀越自身も、縄文時代を「採集経済時代」であると同時に「交換経済時代」として捉えているが、その社会組織が「原始共同態」もしくは「共同態」（Gemeinschaft）以外の何ものでもないという確証は、いったいどこにあるのであろうか。

第二に、そもそも生産形態の恣意的な類型設定によって、その枠にはめて全般的な人間集団そのものを捉えようとすること自体、主客顛倒の誤りであることは、これまでにも再三指摘してきたところである。あくまでも、生産形態が人間集団を規定するのではなく、人間集団が生産形態を創出するのである。経済によって文化全般や人間集団を決定することは、「自然決定論」や「土器型式決定論」と同じ誤ちを冒すことになる。そのような自己矛盾から、もういい加減に脱皮すべきであろう。

## (2) 一般的な共同体概念

そこで、世界史上きわめて独特な文化様相をもっている縄文時代の社会組織や社会関係を捉えるとき、本来ならわれわれは、われわれ自身が独自の概念を設定すべきである。しかし、文化人類学や社会学や経済史学などにおいて、折角、国際的に共通する概念があるならば、いちおう、できるかぎりそれに合わせた概念設定をすることも、あながち無意味ではなかろう。とくに、学術用語というものは、研究の進展や研究者の観点によって、漸次変化してゆくものであるから、時代や地域によつても、多少その概念規定を修正しなおすことも必要である。たとえば、「共同態」（Gemeinschaft）も「共同体」（Gemeinde）も本質的には「共同組織」（Gemeinwesen）として変わらないものであり、縄文時代の社会が、「共同態」的要素をもちながら、なおかつ「共同体」的段階に達している可能性があるならば、この際「共同態」と「共同体」とに区別すること自体、あまり意味がない。

したがって、ここでは、そのようなまぎらわしい区別は別に描いて、GemeinschaftやGemeindeというドイツ語の訳語としてではなく、日本語の「共同体」としての概念規定

をしておく必要がある。そもそも「共同体」という概念自体にも、広義と狭義があり、いわば「超歴史的・一般的」な概念と「歴史的・具体的」な概念とがある。いまここに、縄文時代の集落を考察するにあたって、その社会関係や社会組織を捉えるための媒介として、「共同体」の概念を規定しようとするとき、当然ながら、マルクスらの把握した「歴史的・具体的」な狭義の共同体については問題の対象外にある。あくまでもここに規定しようとする共同体は、「超歴史的・一般的」な広義の基礎概念でなければならないのである。

### (3) 角田文斬の「共同体」(註7)

ここでは、「共同体」概念の原点であるテンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(註1)の一般的な概念規定を基礎にして、「共同体」の本質が規定されている。すなわち、テンニースによれば、「ゲマインシャフト」(共同社会)とは、本質的意志による実在的・有機的な結合体(Verbindung)であり、「共同体」はその「共同社会」の一環であって、「共同制」を本質とする。その「共同制」とは、未分化の状態に於いて融合している血縁と地縁のもつ結合型式を意味しているから、「共同体」とは、「もっとも本能的・生物的な原初的紐帯による結合型式である」という。

すなわち、まず第一に、「共同体は、理念上の存在ではなく、大地の上に現実に存在した人間の集団である」。したがって、その大地の「種類や形態に関連して強く自然的条件に制約されている」。第二に、「共同体は、血縁と地縁とを紐帯として結合されている社会集団である」。そして第三には、「共同体は、なによりも先に、生産の共同組織である」というのである。これを要約すれば、共同体の本質である「共同制」を、もっとも顕著に表現する基本的な要素として、次の3項目をあげることができよう。

1. 大 地 ..... 立地、自然環境、生産手段、資源
2. 人間集団の結合紐帶 ..... 血縁関係、地縁関係
3. 生産形態と共同組織 ..... 所有と分配、協働と分業

このような観點から捉えられる人間集団を、「共同体」と呼ぶのであれば、われわれが縄文時代の人間集団、とくにその基礎となった集落の主体者を捉えるためには、まさにぴったり符合する。いまさら、別に新しい用語を創設するよりも、この概念を「共同体」として用いるのが賢明であろう。

### 3. 集落と共同体との関係

以上のように、「共同体」の概念を検討してみると、その「社会関係」を顕現すべき諸要素の把握は、つまるところ、先に吟味してきた集落の把握における観点や、その本質的な「社会規制」を反映すべき基本的な要素とほとんど一致している。もちろん、概念的には、集落=共同体とはならないが、集落においても、「共同体」においても、人間集団の

実在を根幹として、その立地、結合紐帶および生産形態（共同生活や文化活動の一面）などの要素によって、その「社会関係」や「社会組織」を把えようとする観点や研究態度には、本質的な相違はないはずである。

とくに、集落の主体者たる歴史や文化の主人公を、ただ単なる「人間集団」という漠然とした概念で捉えているかぎり、それは歴史叙述の「誰が」とはなりえない。それを、実在する具体的な人間像として定着していくためには、個々の大地と密着し、特定な「社会関係」をもって結合した実在としての「共同体」の概念を媒介とすることは、きわめて有効であり有意義である。とくに筆者が、集落の定義のなかで、あえて「単位集団」という用語を用いたのは、従来の「共同体」概念のなかには、とかく経済史学的な観点から、生産形態のみに対応するものと限定されてきた憾があったからである。

しかし、「共同体」とは、もともと社会学的な人間関係を具体的に定着するための概念であり、いわば人類のあらゆる文化活動の主体となるべき人間集団を把握するための手段的概念である。これが歴史学や考古学とは、無縁ではありえないし、まして集落を捉える上では、避けることのできない重要な研究対象であることは、いまさらいうまでもなかろう。したがって、この「共同体」の問題を解明せずしては、集落の研究はありえないし、また集落との関連で捉えなければ、「共同体」の歴史的実体はありえないのである。だから、従来の考古学における集落研究の停滞性は、まさにこの共同体研究の欠落に起因するものであった。

ここに、集落と共同体との関係を規定するならば、先に述べた集落の定義からも明らかのように、集落は共同体の本拠地であり、共同体は集落の主体である。したがって、集落研究と共同体研究とは、不即不離の関係にある。むしろ筆者は、もともと共同体の研究は集落研究のなかでこそ行われるべきものであり、共同体のための共同体研究は、社会学や経済学となりえても、歴史学や考古学とはなりえないと考えている。まして、共同体の研究といえば、マルクス経済学の研究であると単純に判断するような、かつての思想統制時代のような次元の低い誤解は、一日も早く払拭しなければ、学問の自由な進展はいつまでたっても望めないであろう。

## 第二節 集落研究の方法

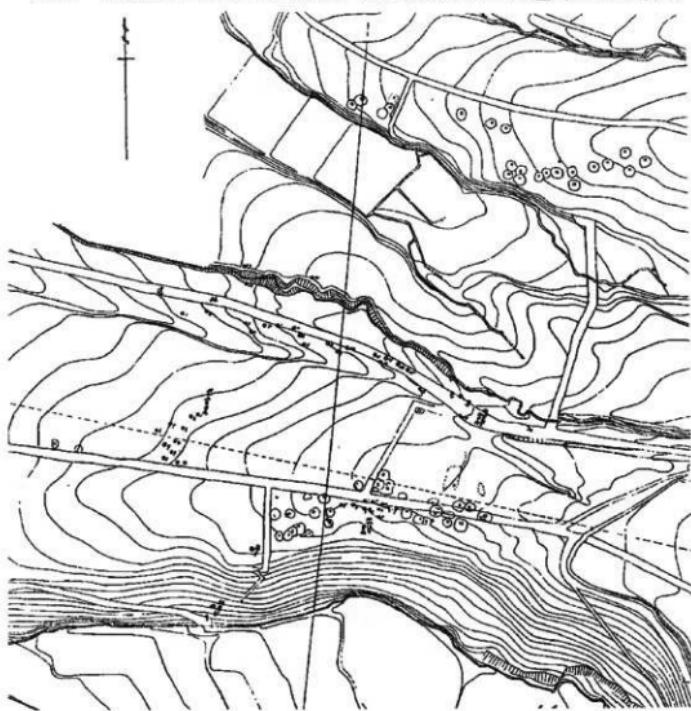
以上のように、集落や共同体の概念を規定することができたとしても、その実体として存在するさまざまな遺跡のなかから、まず、集落および共同体を選別しうる方法や、それを考古学的に実証する方法こそ問題である。実際に発掘調査され、多数の遺物や遺構が発見されたとしても、その現象や様相によって、直ちに集落や共同体を同定しうる的確な標準や根拠というものが、現実にありうるのであろうか。ここいらに、もっとも基本的であ

りながら、もっとも複雑で困難な問題が潜んでいる。しかも、その実体の捉え方自体にも、すでに観点の相違から、大きな差違が現実に生じている。だからこそ、この「集落考」においては、集落を捉えようとする目的意識や基本的観点の吟味・検討に多くの頁をさかざるをえなかったのである。

## I 集落の成立要素

### 1. 集落の範囲

従来、一つの遺跡を「集落」として認定してきた根拠は、もっぱら堅穴住居址の存在に



第2図 尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図

(「尖石」茅野市教育委員会・1957年より)

あった。住居址さえあれば、それは1～2軒であろうと数百軒に及ぼうと、それはすべて「集落」として捉えられてきた。しかし、遺跡の局部的発掘調査によって、断片的な住居址の存在を捉えても、集落全体の規模や形態は定着できないので、集落を捉えるためには、遺跡全面の発掘調査が求められた。それは、住居址群の展開の様相をもって集落の全貌を捉えようとするもので、それが「景観としての集落研究」を目的としていることは明らかである(註1)。

#### (1) 与助尾根集落の場合

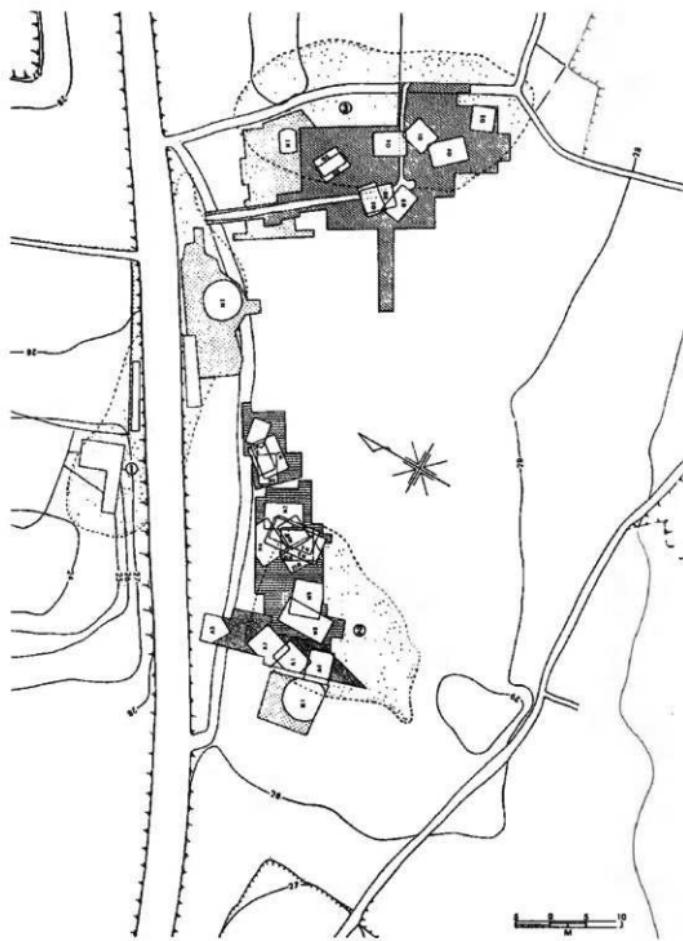
さきに取り上げた、宮坂英式のほとんど単独の努力によって、ほぼその全域が明らかにされたという長野県茅野市の与助尾根遺跡(註16)については、学史的な意義はきわめて大きいことは、すでに述べたとおりである。しかし、これを一つの縄文時代の「集落」として捉える場合、水野正好らが、「集落構造と宗教構造」(註17)を論ずる以前の問題として、はたして、その集落範囲の捉え方が妥当であるか否かの吟味・検討さえされなかつたところに致命的な欠陥がある。

たとえば、小さな支谷や小川を間に挟んで対峙しているとはいえ、同じ台地上に隣接する尖石遺跡との関係が、何ら捉えられていない。にもかかわらず、その小川を挟んで南北に展開する同時期の住居址群が、別々の集落であったという前提のもとに捉えられている。それは、たまたま尖石遺跡では、まだ住居址の存在を知らなかった宮坂が、炉址の発見のみに終始していたので、住居址の露呈に努めた与助尾根遺跡とは、同格・同質には論ぜられないというだけで、別々の集落として捉えるべき何らの根拠にもならない。むしろそれは、一つの集落を捉える上での、研究者の観点や視野の問題なのである。また、静岡県登呂遺跡の弥生時代後期における集落や、竈塚遺跡の縄文晩期における集落の発掘成果などから、それよりも古い縄文中期の集落などは、「せいぜい、こんな程度の規模だったに違いない」という先入観があったに違いない。

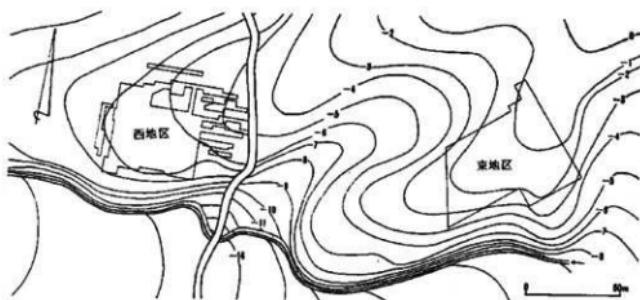
これは、同じ茅野市にある茅野和田遺跡(註18)における集落範囲の判定にしても同様である。その発掘範囲は、造成予定の範囲に限定され、その住居址群がその周辺にさらに拡がるであろうことは明らかである。にもかかわらず、その局部的な発掘事実によって、小支谷を挟んで、東群と西群とに分けて考えようとする。こうした傾向は、住居址群の分布の様相から、いきなり、一つの集落全体の立地から規模・形態までを限定し、その配列の法則性を分析して、その集落の社会構造から宗教構造まで推論しようとする、水野式分析法の影響で、各地で試みられた一つの流行性珍現象である。

#### (2) 横浜市南堀貝塚の場合

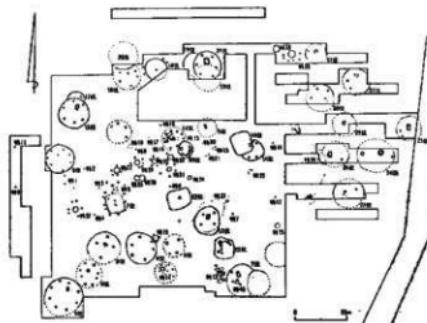
昭和30年に和島誠一・岡本勇らによって発掘調査された南堀貝塚においても、『横浜市史第1巻』(註19)の挿図をみるとかぎり、あたかも一つの集落の全域を発掘したかにみえる。



第3図 蜈塚貝塚の発掘区と住居址群（「蜈塚貝塚」1962年より）

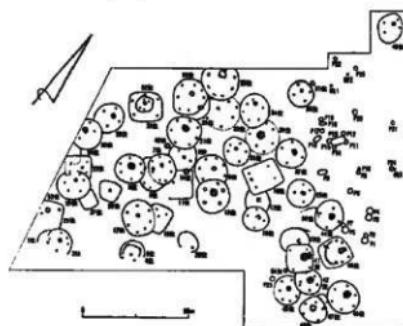


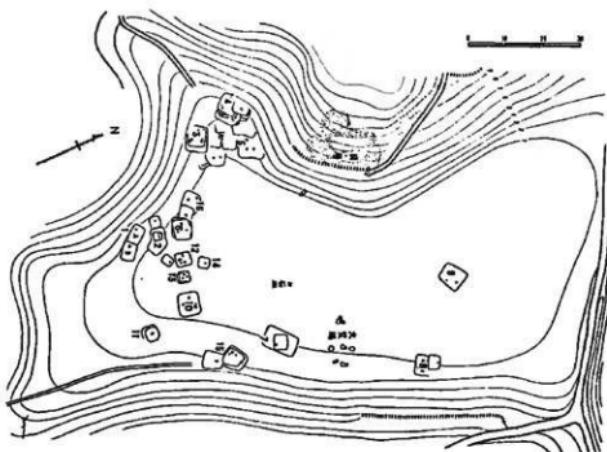
第4図 茅野和田遺跡の地形図（「茅野和田遺跡」1970年より）



△ 第5図  
西地区遺構分布図  
(「茅野和田遺跡」  
1970年より)

第6図 ▷  
東地区遺構分布図  
(「茅野和田遺跡」  
1970年より)





第7図 南堀貝塚の竪穴住居址群（「横浜市史」第1巻 1958年より）

ところが、現地を踏査してみれば歴然とするように、これは、その名の示すとおり、かつての中世城郭の一角であった。遺跡の西側の凹地にあった「ねごや集落」の背後に、東から西に向って連なる大型の半島状台地から枝状に北から南にのびる小型の舌状台地の中腹部に位置している。階段状に構成された曲輪の先端の、やや平坦になった部分を発掘したにすぎない（第7図）。

城郭遺構は、遺跡のさらに南方にのびており、引き続き小さな階段状の曲輪が構成され、またその東側縁辺には、土壘の残欠と腰曲輪および物見状遺構が認められる。とくに、北側の半島状台地からこの遺跡に至る階段状の曲輪にも、随所に貝殻と土器の散布がある。したがって、この南堀貝塚の集落が、かつてはさらにその周辺に拡がっていた可能性が十分にあり、後世、とくに中世の城郭によってその一部が削平された可能性が十分にある。現地を踏んで、南堀貝塚の地形が自然地形でないことは誰でも気がつくはずであるし、中世城郭に多少の認識のある者ならば、即座にそれと判定できたはずである。また、たとえ中世城郭に関してまったくの無知であっても、その地形が縄文時代のままであるか、それとも後世の土木工事の跡であるかぐらいは、まず確認してから調査にかかるのが当然だが、そのような確認はされていないのである。

こうした事前の確認もなく、ただ任意の区域を発掘して、たまたま発見された住居址等の遺構分布の範囲をもって、一つの集落の全貌であるとするのは、あまりにも短絡であり、

早計であるといわねばならない。とくに南堀貝塚の場合、台地の中腹にあるので、当時の生活条件として、その周辺に湧水点や河川や沼湖がなければならぬ。そして、それらとの中間地区に何らかの遺構が存在するか否かの吟味を行わなければ、生活の本拠地としての条件を満たすことができない。しかも、西側縁辺にやや大型の貝層を伴い、発掘された各住居址のなかにも少量ながら貝殻が投入されていたというのであるから、その貝類の採捕の場所から集落までの搬入路や運搬方法などを捉えなければ、その集落の占地の理由や意義を捉えることはできない。

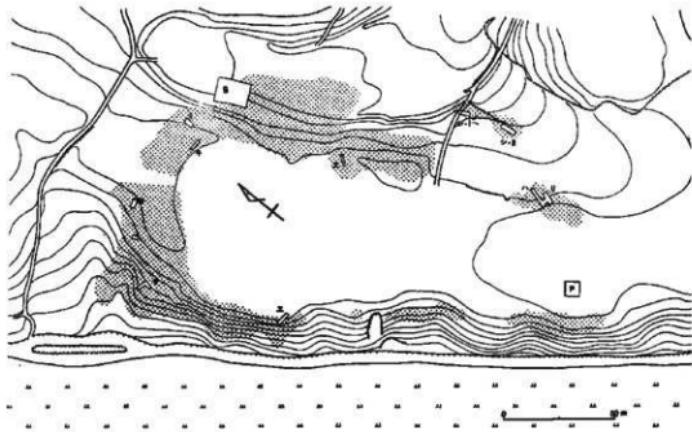
このような多角的な検討により、集落としての存立条件や占地の意義が推定され、それらによってはじめて集落の範囲が確認あるいは予測されうるはずである。この南堀貝塚の場合、いまだに正式な報告書が出されておらず、『市史』という歴史叙述のなかで簡単に紹介されたものであるだけに、ことさら多くの疑問と不信を抱かざるをえない。現地を踏むたびに、集落範囲が周辺に拡がっていた可能性をますます痛感せざるをえない。

### (a) 市川市堀之内貝塚の場合

堀之内貝塚も、史跡公園として現存している範囲が、あたかも一つの集落範囲であったかのごとき印象を、一般に与えているようである。これはとんでもない誤りであって、これもかつては歴然たる中世城郭の一角で、その基部の一端だけが残され、その大半の部分が土取り工事によって削平されてしまったものである。この貝塚の載っている台地も、かつては西から東に約1kmものびる狭長な舌状台地で、それを二本の堀切と土塁によって曲輪取りされた典型的な直線状連郭式台地城で、その先端部に妙見の祠があったことからみても、平安末から鎌倉初期にかけて活躍した「千葉六党」の一人、国分五郎頼通の支城か岩であった可能性が強い(第8図)。

とくに、この台地は、かつてはその北側にある広々とした平坦台地と地続きで、浅い支谷が入っていたものを、人為的に掘切って、舌状台地部の城郭を構築したものと思われる。この種の構築遺構は、千葉市城の腰跡など、千葉氏に関係する古式の城郭形態として、きわめて重要な存在であった。しかし、当時市川市には、中世城郭に関する理解者がいなかったためか、未調査のまま削平されてしまったことは、かえすがえすも残念である。しかも、この舌状台地上には、中世城郭に関する堀切・土塁・腰曲輪・物見などの遺構ばかりでなく、豊穴住居址や貯蔵穴状の遺構も存在していた可能性がある。その証拠として、堀切の断面に住居址状の掘り込みがみられ、また土塁残欠の盛土中などに多数の縄文土器片が認められた。

これによっても、堀之内貝塚の遺跡範囲を捉えるうえで、馬蹄形をなす大型貝塚の内側のみに限定することは、きわめて危険であり、無意味なことである。しかも、中世城郭の基部にある大型貝塚も、南側縁辺には腰曲輪が2~3段めぐらされ、台上縁辺には土塁が



第8図 堀之内貝塚地形図（「市川市史」第1巻・1971年より）

築かれていた痕跡も認められるので、現存の地形をそのまま縄文時代のものであるとすることはできない。とくに中世城郭は、巧みに自然地形を利用しながらも、防禦上重要な地點については、かなり大がかりな土木工事を施していることを忘れてはならない。しかし、もともと中世城郭の実体を知らないのでは、「知らぬが仮」で、何とも救いようがない。

しかも、現在その北側の平坦台地部を全面造成中であるが、その東南端にはれっきとした権現原貝塚があり、「馬蹄形貝塚」もしくは点在貝塚を伴う集落として、かねてより知られており、近々に買収保存の計画もあると聞いて安心していた。とくに、堀之内貝塚のような大型貝塚を伴うほぼ同時期の遺跡に隣接しているので、両者の関係や相違などきわめて重要な問題を孕んでいるので、かねてより注目していたところである。

ところが、最近『堀之内』(註20)なる報告書によると、市川市教育委員会では、いつの間にか土地区画整理組合の造成のため、約15万m<sup>2</sup>にわたる台地全面を、わずか数ヶ月で発掘調査し、貝塚や集落としての何らの実体も捉えぬまま、遺物や遺構の機械的な記録だけを残して、開発に委ねてしまった。その対象区域にも、中世城郭に係わる遺構も確認されていないから、その形態も規模も何ら把握されていない。この調査を引受けた加藤曾平氏（当時筑波大学教授）は、かつて葛西城址の発掘調査を行い、中世城郭には理解をもち、また、縄文貝塚についても、「環境考古学」の立場から注目していたはずである。

しかし、今回の記録保存にもならない「報告書」では、権現原貝塚の実体も堀之内貝塚と



第9図 堀之内貝塚と権現原貝塚の周辺地形図（「堀之内」1987年より改編）

の関係も捉えられず、結局この調査が、開発のための露払いのような遺跡の破壊行為以外の何ものでもないことを物語っている。とくに、権現原貝塚の範囲として、現在の村道で区画された東西80m、南北120mに限定するなど、「環境考古学」とは名ばかりの、視野の偏狭さを如実に表明している（第9図）。

## 2. 集落の景観的要素

以上のように、集落の範囲を捉えること自体、すでに種々の重要な問題を秘めている。従来の考古学者や行政関係者が規定しているような「遺構の分布範囲」などという短絡的な把握ができるほど単純な問題ではない。従来、この遺跡の範囲を明確に捉えることに努力しなかったところに、集落研究が停滞していた原因がある。範囲や輪郭の明確ではない実体というものはないからである。そこで、集落が集落として成立するための諸条件のうち、集落の実体を捉えるための不可欠な要素となるものを挙げておかなければならぬ。

もちろん、その「集落の実体」を捉えるための觀点にもいろいろあって、その科学的の目的とするところによって、その具体的な内容は変ってくる。ここでは、当然ながら歴史叙述のための歴史科学的な觀点に基づくものでなければならない。

### (1) 歴史と自然について

集落を取巻く自然条件は、当時の人類集団の生活環境としてきわめて重要な意義をもっている。従来、集落が占地する地形・植生・動物相などは、当時の自然環境として、いわば考古学の補助的・附隨的に捉えられ、もっぱら人文地理学的な考察が加えられるのが一般であった。もちろん、「歴史地理学」の立場から、生活・文化の条件として地形や地域を捉えようとする向きもある。しかし、それらの多くは、ややもすると「自然決定論」的な結論に導かれる恐れのある、いわば自然中心的な觀点に基づくものであった。

しかし、こうした人文地理学や歴史地理学の研究成果に支えられながらも、なおかつ歴史科学の觀点から自然を見直す必要があり、そのような人間を中心とした自然觀というものが必要となってくる。このような觀点や方法が「環境学」といわれるものであり、また「歴史環境」という概念の基礎となっている。

そもそも人類は、地上に生息する自然の生物であり、その自然の中でしか生きられない一動物である。だから、自然なくしては人間の存在もなく、人間の歴史などありえない。と同時に、人間は単なる自然の生物ではない。意志をもって、自然に挑む行動的な動物である。人間にとての自然は、他の動物における宿命論的・絶対的存在ではない。人間は、自然の眞理を探求し、理解し、それに調和しつつり超えようとする意志をもっている。だから、人間の文化の発展は、この自然との闘いの歴史であるといわれる。ここに、自然決定論の成立しない根拠がある。

しかも、いかに実証的科学といっても、自然のための自然科学などは、もともとありえない。その自然は、所詮現実に生きている人間の観点や観察による人間の自然にすぎない。人間が捉えうる自然は、人間とかかわりをもつ自然であり、人間の生活や文化に影響をもつ自然としてこそ意義をもっている。元来自然そのものを観る眼も、それを科学する方法も、人間の生活・文化の発展過程のなかで、生まれ育ってきたものである。したがって、人間の歴史なくしては人間の自然もない。このように、歴史と自然とは表裏一体、相即不離の関係にあることを、まず認識しなければならない。

## (2) 集落の立地

集落が占居する立地は、単なる偶然として、集落の周辺に展開する自然条件や自然環境ではない。むしろ、当時の歴史や文化の基盤として、集落の存立にかかわるもっとも重要な基盤である。たとえば、食用植物の繁茂や建築用材や薪炭などのための植生・湧水点や水上交通などの水利、狩猟・漁撈などの生産のための資源、土器・石器などの用具製作のための素材、降雨・風向・日照などの自然条件その他さまざまな問題がからんでくる。それは天与の自然条件がどうであったかという、単なる当時の自然環境の復元に止まるべきものではない。むしろ、「なぜ、当時の人がとは、その立地を選んだのか」という、縄文人の意志の問題である。

最近、「環境考古学」という言葉が流行しているようであるが、その多くは、ただ単なる生活舞台周辺の自然環境の復元に止まっている。これは、考古学というものを「復元学」であると誤解している証拠であり、その内容からみると、せいぜい「古環境復元学」といった程度のもので、その根底において、もっとも重要な歴史的觀点が欠落しており、考古学とはほど遠いものになっている。

一般に考古学の対象というと、「遺跡」・「造構」・「遺物」の3者があげられるが、前章でも述べたように、当然「遺跡」の概念のなかに含まれるべき「環境」というものが、従来の旧幣な概念や行政上の形式的概念のなかには入っていないので、別個に「歴史環境」という概念を立てざるをえないである。この「歴史環境」とは、遺跡を取り巻くあらゆる自然的条件で、その立地の地形なり植生なり動物相なりの痕跡もまた、考古学的資料である。そこに、それらを選定した当時の人がとの意志や目的意識すなわち「心」が秘められているはずである。その意志や「心」を捉えるためにこそ、その環境や自然条件を歴史資料とするのである。

したがって、集落の立地とは、一遺跡の存立基盤であると同時に、その周辺に展開する集落群との関連や有機的結合を知るための文化的基盤でもある。たとえば遺跡周辺の支谷や低湿地に発達した泥炭層から検出される花粉や、木質物・植物種子の炭化物の分析によって、確認される自然遺物などの資料は、ただ単に当時の自然環境を復元するためのみの

ものではない。そこには、自然に対して働きかけた当時の人の文化活動の痕跡を見出すことができるはずである。また植生の復元においても、自然植生か栽培または管理植生かを見究めることこそ肝要となるはずである。

### (3) 集落遺構

集落が「日常生活の本拠地」である以上、その生活に必要な施設や、日常生活を行えば必然的に残るその痕跡などが、「遺構」として発見されるはずである。その具体的な現象は、時代・時期、地域・立地などによって、それぞれ異なってくるが、その基本的なものは、各時期・各地域に共通しているはずである。そこで、集落に伴うべき遺構として、当然考えられるものを列举すれば、縄文時代の場合、少なくとも次のとおりとなるであろう。

A・住居址………人間集団が居住するためには不可欠な施設で、風雨や寒暑を避け、睡眠や食事をとる休息の場所であるとともに、出産・育児などのために安全な施設として、集落のもっとも基調となる。

とくに、その集落が「日常生活の本拠地」となるためには、その場所にある程度の期間定着する必要がある。その定着を可能ならしめる施設が住居である。

B・炊事址………日常生活の場所には、食事のための調理や熱処理を行った痕跡が伴っている可能性が多い。早期末茅山期に特徴的にみられる「炉穴」(第10図)は、その様相から明らかに炊事址であると考えられるが、その他の時期のものはあまり明確ではない。住居址内の炉址も、その一部として用いられていた可能性もあるが、その規模や構造などから、せいぜい灯りとりや暖房程度で、炊事には適さない。むしろ、炊事は屋外で行ったものと思われ。住居址周辺の焚火址などがそれであった可能性がある。

しかし、この炊事や調理の場として、縄文時代には、古墳時代の「かまど跡」ほど本格的な施設は伴っていないかったと思われる。野外の焚火址なども、まだ十分には検出されていないので、むしろ、今後そのような問題意識をもって追跡調査を行うべきであろう。

C・貯蔵穴………住居に付随し、その定着性を補助する施設として、食糧蓄蔵のための小堅穴がある。直径1~2mの円形プランで地中に1~2mほど掘りこまれた小規模なものであるが、なかからドングリなどの炭火物が多量に検出される例が多い。おもに、中~後期に多くみられることからも、当時の集落が定着化したことを物語っている。(第11図)

D・その他の小堅穴………その他、集落遺跡には、各種多数の小型の堅穴が伴っているが、その用途が不明のものが多い。日常生活には、たとえば便所なども必要となり、その施設が伴っていたはずであるが、まだ、その明確な証拠は捉えられていない。しかし、福井県鳥浜貝塚(註21)などから、多数の糞石(糞の化石)が検出されている。それが、家犬のものか人間のものかは判別しがたいが、いずれそのような痕跡も



第10図 加曾利貝塚東側斜面出土の炉穴群



第11図 加曾利南貝塚出土の貯蔵穴

確認されるであろう。

E・湧水点……日常生活のために、絶対に必要となるのは飲用水である。縄文時代には、まだ「井戸」のような施設は発見されていないが、集落の立地をみると、周辺に支谷の奥などに湧水点が存在している。その湧水点は、住居址群のすぐ近にあるとは限らないが、土器などで汲んで運搬し、各住居内に貯えたとしても、集落とそれほど隔離した位置にあったとは考えられない。この湧水点も日常生活には不可欠であり、漁獵に利用される場所であるため、当然集落のなかに含めるべき重要な場所である。

F・舟着場……縄文時代の交通は、内陸台地部の森林や草地における道路の開設やその維持が困難なので、おもに河川などを利用した水上交通であった。したがって、集落の立地をみても、河川につながる支谷の縁辺にあるものが大多数を占めている。したがって、水上交通に頼っている集落の場合、その集落の入口として、当然舟着場があつたはずである。それは、まさに集落の「玄関口」として、集落の範囲内に包含されるべきものである。

### 3. 人間集団の実在

以上、集落が集落として存立するための諸条件について、ごく簡単に触れてきたが、それはおもに集落の外的な要素であって、それだけをもって集落の実体を捉えることは、ほとんど不可能である。従来の集落研究が、この段階で止まっていたのは、集落を人文地理学における「景観」として捉えていたからである。歴史科学における集落の把握は、むしろ、それらの集落景観を構成する主体たる人間集団やその共同組織の実体の把握にある。すなわち、集落の内面的な要素を顕現することこそ、重要な課題となるはずである。まず、その主人公たる人間集団の存在を確認すべき遺構・遺物について触れておきたい。

#### (1) 墓葬遺構

縄文人は、その初期から仲間が死亡したときは、その死者を丁重に埋葬している。その形態は、時期と地域によって多少異なっているものの、死者をないがしろにしないという心情には、縄文時代を通じて共通したところがある。これによって、まずわれわれは人間集団の実在性を確認することができる。とくに、縄文時代の早期末ごろから、合葬例や墓壙が集合している事例などによって、当時すでに共同墓地的な埋葬ゾーンが規定されていた傾向も確認されている。このことから、人間集団に特定な結合紐帯のあったことや、そのベース（基盤）として、それぞれに特定な結合紐帯をもって構成された集落が実在していたことを確認することができる。

埋葬遺構としては、これまでに発見されたおもなものとして、次のようなものが挙げられる。それらはおよそ貝塚遺跡において発見されたもので、貝塚以外の遺跡では、人骨の

遺存が乏しいので、なかなか確認したいが、死者に対する心情には、貝塚の有無による差別はなかったはずであるから、それは一般普遍的な傾向として捉えられるであろう。

A. 墓壙…………一般に成人骨が発見される場合、当時の地表面から0.5～1mほど掘りくぼめた墓壙内に、屈葬または伸展葬の姿態で埋葬されている。その墓壙の規模・形態は、被葬者の姿態によってまちまちである。同時期・同遺跡において各種の形態が共存している実例などから、その墓壙の規模・形態は、死者の死後硬直状態に合わせて、そのまま埋葬するための必要範囲によって決められていたものとみるべきであろう。

B. 豊棺葬…………おもに中期から晩期にかけて関東地方でみられる例である。深鉢形土器のなかに胎児（流産児）骨や乳幼児骨などが納入された形で発見されるもの。その多くのものが、わざわざ底部を打欠いた土器が用いられているところから、もともと遺体をそのまま納めて土中に埋葬し、その骨だけを拾うための洗骨形態であった可能性が強い。

C. 廉屋墓…………千葉県の姥山貝塚（註22）や加曾利貝塚における例のように、1軒の住居址内に折り重なった状態で数体の人骨が発見されるもの。これは、「不慮ノ事故ニヨツテ横死セル状態」（註22）であったと思われ、その死因が尋常ではなかったため、その死体に触れることも移動することもなく、むしろその惡靈を封じ込めるために、そのまま住居もとも埋めてしまったものと思われる。

したがって、これによって当時1軒の住居のなかにいかなる家族が何人同居していたか、その家族構成を知る上で貴重な資料となっている。いまのところ、中期と後期の数例が発見されているにすぎないので、まだ一般的なことはいえない。

D. 盤状集積…………四肢骨を方形に配列し、その上に胸骨・肩甲骨・頭骨などを積みあげたもので、その年令・性別の明確なものはほとんどない。貝塚においては、一般に「散乱骨」と呼ばれているものがあるが、そのなかで、乱葬ではあるがひとたまりになつて発見される例が多い。それは、この盤状集積の崩れたものと考えられる。しかも、そのほとんどのものが年令・性別が不明であるが、比較的華奢な骨骼が多く、少年・少女骨と思われる。一般的墓壙や豊棺葬には、少年・少女骨は認められないことから、少年・少女の場合は、乳幼児と同じく、いったん洗骨してから、その骨を集め再埋葬した可能性が強い。

E. ストーン・サークル…………これについては、後述の「特殊遺構」の項で取上げたいので、ここでは、これも埋葬形態の一つであることだけを示すに止めておく。

## (2) 特殊遺構

各地の遺跡から、ときおり発見される遺構のなかで、通常一般的の遺跡からは滅多に発見

されない珍らしい遺構がある。その形態や構造からみても、決して日常的なものとは考えられず、その機能も常識的には解明できないものが多い。そのような一般的ではないものを、総括して「特殊遺構」と呼んでいるが、そのおもなものを挙げると、次のとおりである。

- A・ストーン・サークル………繩文前期の長野県上原遺跡(註23)、中期の長野県阿久造跡、後期の山形県大湯環状列石など、自然石を多数組み合わせて、中央の立石や「日時計」状の石組を中心に、石組の墓旗群が円形に展開しているものをいう。これは、ヨーロッパでみられるストーン・サークル(stone circle)やストーン・ヘンジ(stone henge)と、その性格や意義が同じであるとは限らない。
- B・石柱祭壇………ストーン・サークルの中央部における立石遺構だけが独立し、それが特定な住居址の一隅に、祭壇状に設けられたものである。たとえば、長野県与助尾根遺跡や井戸尻遺跡(註24)など、中期の遺跡にみられる。
- C・敷石住居址………石柱祭壇の発達したものと思われ、平地上に柄鏡形のプランをもち、その床面に扁平な自然石を敷きつめ、中央に石囲炉を設け、その一隅に石柱祭壇をもつもののや石棒を立てたり横たえたりするものが多い。方形の派出部は、入口と考えられるが、柱穴を作わないところから、屋根を架けない露天の施設で、一般的な住居とは考えられない。繩文後期に、関東台地で盛行する。
- D・柄鏡形住居………敷石住居址と同様なプランをもつが、堅穴式で柱穴を伴い、明らかに屋根を架けている。方形の突出部に柱穴や小竪穴を伴い、これは出入口とは考えられない。同じ遺跡内に、同時期の円形住居が共存する例や、この柄鏡形住居址ばかりが集合する遺跡の周辺に、同時期の円形住居址ばかりが集合する遺跡が展開していることから、これは一般的な日常的な住居と考えるよりは、特殊な機能をもった施設であったと考えるべきである。繩文中期末の一時期に関東地方一円に盛行するが、その後の時期にも、その周辺地域にもあまりみられない。
- E・巨大な堅穴遺構………これは、昭和48年に千葉市加曾利貝塚で発見された長径19m、短径16mの楕円形を呈し、柱穴列が3重にめぐるもの(註25)で、その床面上には数ヶ所の焚火址を有し、石棒2本、特殊台付土器2ヶおよび土偶片を伴うのみで、その他の日常的な生産用・生活用の石器や土器はほとんど発見されなかった。これは規模・形態・構造上からも、決して日常的・一般的な住居とは考えられない。その後、昭和57年には、佐倉市吉見合遺跡(註26)において、長径19m、短径16.5mの楕円形を呈し、直径1~1.5mの巨大な柱穴を伴い、その床面から石棒・土偶・装身具などの特殊遺物ばかりが多数出土し、日常的な生産・生活用具はあまり発見されなかったという。これも、加曾利貝塚発見の遺構と同類のものであることは明らかである。

以上のような遺構は、その数において決して多くはなく、周辺の同時期の遺跡からはほとんど発見されないことからも、特殊な存在である。それは、他の一般的な遺跡とは隔絶した無縁な存在であるよりは、むしろ、その周辺遺跡の共同的な存在であり、それらの人間集団を結集するような核的な存在であると考えるべきである。

それらの遺構の機能を考えると、人間集団の結合紐帶の顕現化されたものと思われる。すなわち、それらの遺構が何らかの信仰の対象や共同祭祀の場であるならば、その背景には当然ながら、それを共有すべく結合された人間集団やその共同組織がなくてはならないはずである。このような特殊遺構の存在は、その「特殊性」の実質的内容として、当時の日常的な生産や生活との関係や、人間集団そのものの共同組織のあり方を明確にするうえで、きわめて重要な課題となるのである。

#### 4. 生産的背景

集落の存立のための、もう一つの大きな要素は、その人間集団そのものの生命の維持のための食糧確保の可能性の問題である。すなわち、日常の生産活動と矛盾なく結合していくなければならない。

ところが從来、縄文時代を狩猟・漁労を中心とする「採集経済」であると規定して以来、その固定観念にとらわれ、その既成概念の枠内だけで、あらゆる現象を解決してしまおうとする誤った観点が横行している。とくに、L・H・モルガンはじめとするマルクス＝エンゲルスおよびG・チャイルド(註27)などの文化進化論的な観点から、一線的の發展段階説に無理やりあてはめようとする傾向が、いまだに強いのである。そのようなヨーロッパ・アメリカを中心とする机上の仮説が、日本の縄文時代にも適合するという根拠も可能性もまったくどこにも存在しないのである。

もし、そのような一方的な仮説が許されるのであるならば、そのような狹隘な観点に拘束されず、むしろ、より広い視野をもって、特定な現象を特定な枠組のなかに最初から当てはめるよりは、まず、これまでに確認された諸現象をもとに、現在われわれが考えうるあらゆる可能性をあげておいて、考古学的事実の一つ一つがいかなる可能性に適合するかを検証しつつ、その可能性の限界を規定してゆく方法のほうが、はるかに合理的であり、信憑性があり、はるかに実際に近くなる。

そこで筆者は、さきに「縄文時代における生産力の発展過程」(註28)において、次のような生産形態の変遷の可能性を提示した。

##### (1) 植物採集形態

- A. 自然採集形態……ただひたすらに、自然植生の自生や再生にのみ依存し、自然林のなかで食用植物を探し求めて、直接に採集する形態。

- a. 個人的採集………いつでも、どこでも、誰でもが恣意的に乱獲する形態。
- b. 集団的採集………集落や共同体が共同で、特定地域内で定期的・計画的に採集する形態。
- B. 自然栽培形態………特定な地域の特定な食用植物を、その環境の整備など人為的な保護によって自生や再生を促進し、その収穫の安定性を期する共同的形態。
- c. 管理栽培………特定な食用植物を選定し、その周辺の除草や伐採などの管理によって育成する形態。
- d. 植栽管理………特定な根茎や果実のなる木の苗などを、人為的に特定な区域に移植して、集中的な管理栽培を行う形態。
- C. 播種農耕………特定な土地を耕し、計画的に穀類の種子を播き、施肥や除草などの管理によって結実を促進して収穫する計画的な生産形態。
- e. 焚烟農耕………自然発生の山火事などの後に、特定な穀物などが繁茂することからヒントを得て、特定の区域の山林を焼き払い、アワ・キビなどの穀類を播種し、その地力によって自然に繁茂する結実を収穫する形態。
- f. 畑地耕作………特定な平地を開墾し、穀類の播種、施肥、除草などの管理と育成によって、その作物を収穫する陸耕栽培の形態。
- g. 水田耕作………特定な傾斜地や低地を開墾し、灌漑によって水田を拓り開き、もっぱら水稻を播種し栽培する形態。

これらの植物性食糧の獲得方法のうち、従来一般に、おもにAを「採集形態」とし、それに対してもCをもって「農耕生産」として捉えられてきた。しかし、いかにG・チャイルドが農耕の開始をもって「生産革命」であるといっても、そのような農耕生産が予備知識や事前体験もなく、その前提的な段階もなく、突然変異のごときなり発明されるわけがない。農耕の実際的な条件として、当然ながら植物の生態に対する知識や耕作の技術や道具などが必要であり、それを習得するまでには各種の試行錯誤や重厚な体験がなければならない。

そのような前提的な段階や形態が、道具や痕跡として残らないために不明であるからといって、それを無視して、農耕具や水田址の発見される形態に、いきなり「革命的に」飛躍したと考えるのは、あまりに短絡的であり、農耕の実体を知らぬ者の皮相的な把握といわねばならない。

## (2) 狩獵形態

- A. 弓矢の発明………左右対称の三角形で、その両翼が逆刺になっている石鏃の出現は、遠距離から獲物を的確に捕えるための弓術の発達を物語っている。現に、石鏃の出現とともに、シカ・イノシシをはじめ、ノウサギ・キツネ・サル・アナグマなどを捕え、

ガン・カモ・キジなどの飛ぶ鳥まで射落している。これによって、縄文人はいろいろな種類の獲物を大量に確保することができ、食糧の増加と安定度は急速に拡大されたに違いない。

B. 家犬と陷阱…………縄文人は、早期からイヌを飼っている。しかもイヌが死ぬと、人間と同じように丁重に埋葬しているので、単なるペットや家畜としてではなく、集落の一員、とくに狩人の助手として狩猟活動の中で重要な役割を果していったことを物語っている。

しかも、家犬が一般的になる前期から中・後期にかけて、全国的に陷阱が発見されるようになる。これは、当時イヌを使ってケモノを陷阱に追い込むような大がかりな集団狩猟が行われていたことを示している。当時捕えられている獲物も、イノシシ・シカ・ツキノワグマなどの大型獣が大半を占めていることからも、当時の狩猟の共同性がうかがわれる。

とくに、このような現象は、集落の集中性や定着性および当時の社会組織の発達状況と対応しており、その社会的背景こそその前提となっている。すなわち、同じ弓矢という道具を用いても、その狩猟の形態は個人で行うものと集団で行うものとでは、その獲得量ははるかに違ってくるし、その母体となる集団の共同性や組織によって、その様相はまったく違ってくる。これらを、ただ単純に「狩猟形態」として一括してみても、はたしてそれがどれほどの意味をもつであろうか。

### (3) 漁撈形態

従来、漁撈などはごく容易な作業であるとみられ、植物採集などと同様に、単純な採集形態として捉えられてきた。しかし、海とは、時には人間の生命などいとも簡単に呑みこんでしまう大自然の驚異である。海の摂理は、よほど重厚な知識や体験がなければ、悉知したり凌駕できるものではない。事実、先土器時代の人びとは海を恐れて近づいていないのである。敢然と海に挑んで、はじめて海産資源を開拓したのが縄文人だったのである。

この漁撈という新しい生産技術の発明によって、新たな食糧資源を確保することができたことは、食糧の種類やその絶対量が急激に増大したことを意味し、縄文人の食生活はそれ以前よりはるかに安定したに違いない。縄文時代に人口がにわかに増大し、集団生活が顕著となり集落が定着的になるなど、文化様相が一変したのも、この海産資源の開拓に起因するところが大きかったと思われる。その漁撈活動も、時期や地域によって大きく変化しているが、それらを総括してみると、およそ次のような諸形態に大別できよう。

A. 採集形態…………海岸でコンブやワカメなどの海草類やアサリやハマグリなどの貝類を直接採拾する形態で、格別の道具はなかったか、あったとしても遺物としては残らないものであった。

- 
- B. 刺突漁法………ヤス・モリ・弓矢などで魚を刺して捕える方法。ヤスは、柄の先に骨製の尖頭器を固定し、柄を手に握ったまま水中の魚を直接刺して揚げる道具である。モリは、柄の先に装着するモリ先が柄から離脱するようになっており、そのモリ先に細繩をしばりつけ、その繩の末端を手に持ち、柄のまま魚をめがけて投げつける。そして魚の体中にめりこんだモリ先を魚とともに繩を引いて手繩り寄せる道具である。
- C. 釣漁法………鹿角を削って、現代の釣針とまったく同形のものが作られている。沿岸地方で、前期から中期にかけてはおもに関東地方において、後期から晩期にかけてはおもに東北地方において発達している。
- D. 網漁法………縄石製の浮子と石製や土器片利用の籠りが、沿岸の貝塚から大量に出土し、しかもマジダやマイワシなどの小魚の骨が大量に発見されることから、その存在が推定される。しかも、その出土量などから、投網などの個人的な形態よりも、西み網などの集団的な形態として用いられていた可能性が大きい。
- とくに、この網漁法の存在は、独木舟の発明などと対応して、従来の刺突漁法や釣漁法などの個人的・個別的な漁法から、集団的・共同的な漁法への転換や発展を暗示している。
- E. 集団漁法………前期から晩期にかけて、福井県真鶴(註29)で大量のイルカが捕られており、東京湾沿岸でも前期から後期にかけて、イルカやクジラの骨がかなり大量に出土している。これらの事実からみても、イルカやクジラの生態やその捕獲の条件から考えて、決して個人的・個別的ななしうる業ではない。当時すでに、かなり組織的・計画的な集団漁法が確立していたことを物語っている。

#### (4) 生産形態の動態

以上のとおり、縄文時代においては植物採集・狩猟・漁撈などの生産があり、それぞれをいくつかの形態や段階に分けることができる。しかし、いかなる時期のいかなる地域においても、それらのうちの単一の生産形態にのみ依存したり、単純な状態で固定していたわけではない。この生産形態の発展的な変化を大局的にみて概説するならば、およそ次のような傾向性を見出すことができるであろう。

- A. 生産の多様化………早期から晩期まで、時期が進むにつれて、縄文人は新開地を求めてあらゆる地域に進展している。それにつれて、各地の資源が開発されてゆき、その自然条件や生産対象の変化のため、生産技術の創造や進歩により、その形態がますます多様化していった。しかも地域によって、その組合せや主体となるものと補助的なものとが異なり、全体の様相が変化するので、それが地域性として捉えられるのである。

- B. 生産の複合化………縄文時代においては、その技術や道具の限界性や、人口の増加

や集落の定着化のため、採集・狩猟・漁撈のいずれでも、単独の生産形態のみによつては生活を維持することはできない。当時はまだ、それだけの生産力をもつほどの安定した形態は確立されていなかった。

とくに各地域において、自然条件や資源の制約を受けながらも、その地域に適応しつつ生活を維持してゆくためには、その地域において可能な限りのあらゆる生産形態を併用せざるをえなかつたはずである。実際に、時期が進展して、人口が増加し集落が定着するにつれて、いくつかの生産形態が次第に複合している。

C. 生産の共同化……各地域の自然条件や道具の限界性を克服し、あくまでもその地域の資源に依存してゆくためには、個別的な力だけでは食糧生産は間に合わない。そこで、共通の資源を共有する地域内のいくつかの集落が協力し合うことによって、効率がよく、確実で安定性のある共同生産を行つた。とくに、その対象によっては、イルカやクジラなどのように、共同で行わなければほとんど捕えられないものもある。

実は、縄文時代のめざましい生産技術の開発や道具の発明は、多数の集団のそれぞれの個別的な体験や知恵を結集したことによるものである。その背景には、集落内における社会規制の発達や集落間の共通性や関連性が密になつてゐるという現象があり、それは当然、社会的な共同性によって招來した結果として捉えることができる。

D. 生産の分業化……多様化し複合化する生産形態において、各地域には、それぞれ地理的条件や資源に適合した特有な食糧生産がある。しかし、それが植物採集であれ、狩猟・漁撈であれ、それらのシーズンは限られており、常に安定して食糧を供給できるわけではない。そこで、その地域の特産物を大量に確保し、それを食糧の乏しい季節のために貯蔵しておくねばならない。

各集落や各地域において、それぞれ豊富な特産物を貯蔵するようになると、相互間の共同性や連帯性が進むにつれて、常に同じ生産を共同で行うよりも、各集落間や地域間で、その地域性に適応した役割の分担により、それぞれの生産効率を上げるべき専従的な分業が行われるようになった。これは食糧生産のみに限らず、各地における土器や石器の出土状態をみても、それぞれの原材料の豊富な地域において、それぞれ分業的生産が行われていたことがわかる。

E. 余剰生産物の流通化……各地において、その地域には乏しいが、生産や生活のためには不可欠な資源というものがある。それを豊富な地域から補充しなければならない。各集落が、各自にそれぞれその欠乏物資を確保するために多大の労力を費やすよりは、地域間で共同で生産した特産物や余剰物資をもって、お互の欠乏物資と交換することによって、相互に補完し合うほうがはるかに効率がよく、合理的である。

集落間や地域間において、生産の多様化、複合化、共同化および分業化が進むにつ

れて、そのような共同生産物の交流化に向うのは当然の帰着であって、そのような観点から考古学的成果を再吟味してみると、意外にもそれを実証すべき事実があまりに多いことに驚くであろう。

以上のように、縄文時代における生産形態は、従来考えられてきたような、早期から晚期に至るまで、常に自給自足的な経済段階に固定されていたわけではない。縄文時代は、そのような封鎖的な社会ではなく、ある時期には、すでにかなり開放的な共同社会における流通段階にまで達していたと思われる。このような可能性に基づく、柔軟な観点によって、縄文時代の文化を再検討もせずに、従来のような固定観念に固執していたのでは、当時の集落の実体も的確に把握することはできないはずである。

(千葉市教育委員会・文化課)

〔脚註〕

1. 後藤守一「上古時代の住居」上・下『人類学・先史学講座』15・16、雄山閣(昭和15年)  
関野 克「日本古代住居址の研究」『建築雑誌』48巻 491号(昭和9年)
2. 杉原莊介『原史学序論』草芽書房(昭和18年)
3. 小林連雄「多摩ニュータウンの先住者一主として縄文時代のセトルメント・システムについて」『月刊文化財』112(昭和48年)
4. 後藤和民「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』27号(昭和45年)  
後藤和民「縄文集落の概念」『縄文文化の研究』8、雄山閣(昭和57年)
5. 大塚久雄『共同体の基礎理論』岩波書店(昭和30年)
6. 小野忠誠「弥生時代の共同体」『共同体の研究』上巻 古代学協会(昭和33年)  
近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』21(昭和34年)  
木下 忠「弥生時代における農業生産集落の構造」『歴史教育』14巻3号(昭和41年)
7. 角田文衛「共同体」一研究序説『共同体の研究』上巻 古代学協会(昭和33年)
8. カール・マルクス著 手島正毅訳『資本主義生産に先行する諸形態』大月書店(昭和38年)
9. マルクス『経済学批判』『マルクス・エンゲルス全集』第7巻 改造社(昭和4年)
10. カール・マルクス著 向坂逸郎訳『資本論』第1巻 岩波書店(昭和26年)
11. 前掲註8の付録2「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」
12. L・H・モルガン著 荒畠寒村訳『古代社会』古明地書店(昭和28年)
13. カール・マルクス著 布村一夫訳『古代社会ノート』合同出版社(昭和37年)
14. 堀越正行「縄文時代の集落と共同組織—東京湾沿岸を例として—」『駿台史学』31(昭和47年)

- 
15. テンニエス著 杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 岩波書店（昭和32年）
  16. 宮板英式『尖石』 茅野市教育委員会（昭和32年）
  17. 水野正好「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」日本考古学協会第29回総会研究発表要旨（昭和38年）
  18. 『茅野和田遺跡』 茅野市教育委員会（昭和45年）
  19. 和島誠一「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史』第1巻 横浜市（昭和33年）
  20. 『堀之内』 市川市教育委員会（昭和62年）
  21. 『鳥浜貝塚』— 1980～1985年度調査のまとめ — 福井県教育委員会（昭和63年）
  22. 村松瞭・小金井良精・八幡一郎『下總姥山ニ於ケル石器時代遺跡ト其ノ貝層下発見ノ住居跡』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告5篇（昭和7年）
  23. 『上原遺跡』長野県教育委員会（昭和32年）
  24. 藤森栄一『井戸尻』中央公論美術出版（昭和40年）
  25. 後藤和民・庄司克・飯塚博和「昭和48年度 加曾利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』第8号（昭和57年）
  26. 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要II』 佐倉市教育委員会（昭和59年）
  27. Childe, V. Gordon; "Social Evolution" 1950, London.
  28. 後藤和民「縄文時代における生産力の発展過程」『考古学研究』第29巻2号（昭和57年）
  29. 『真脇遺跡』能都町教育委員会（昭和61年）